



島根大学広報誌 広報しまだい

Shimadai

2013.10 vol.18

優勝報告 荒井悦加選手

教育学部卒
エディオン

第97回日本陸上競技選手権大会 女子3000m障害



【学長スペシャル対談】

レアアースを含む
「ランタンバナジウム褐簾石」を発見

山口大学大学院 理工学研究科 准教授

永寫真理子さん

話題ゾクゾク、興味モリモリ。

島大

検索



学長
スペシャル対談

撮影協力/松江市 アクイール 碧の迎賓館

山口大学大学院 理工学研究科 准教授
島根大学大学院総合理工学研究科卒業

島根大学 学長

永島真理子さん×小林祥泰

NAGASHIMA MARIKO

KOBAYASHI SHOTAI

永島真理子さん(左)/1978年生まれ、福岡県福岡市出身。01年3月、島根大学総合理工学部地球資源環境学科を卒業後、同年4月島根大学大学院総合理工学研究科地球資源環境学専攻に進学。03年3月同課程を修了し、同年4月に同研究科マテリアル創成工学専攻に進学。06年3月に同課程を終了し、博士(理学)の学位を取得。その後、フンボルト財団博士研究員(キール大学)、日本学術振興会海外特別研究員(ベルン大学)、ベルン大学Assistant、島根大学大学院総合理工学研究科プロジェクト研究員を経て、10年4月より山口大学大学院理工学研究科地球科学分野講師、13年4月准教授に就任。

■島根大学の研究・地域貢献事業紹介

- ①法文学部 田籠 博教授 9
- ②医学部 原 祥子教授 11

■留学生たちの島根への想いを聴く

- ランチミーティング 13

■しまだイトピックス 15

■学生プレス研究会始動/雲南便り 19

■サークル紹介 21 茶道部/剣道部

■島根スサノオマジック紹介・ 島根大学支援基金寄附者一覧・プレゼント 22

好奇心こそが、自分を成長させる

ゲストは、レアアースを含んだ新種の鉱物を発見した永島真理子さん。
国際色豊かな学生時代の体験を活かし、世界規模で活躍する永島さんならではの、
グローバルな話題があふれる対談となりました。

日頃から、いろんなことにアンテナを張ることが大切
研究が人と人を繋ぎ、今回の発見に携われました

学長 今回のレアアースを含む
新鉱物の発見、おめでとうござ
います。この「ランタンバナジウム
褐簾石(かつれんせき)」は一体
どのようなものですか？
永島 褐簾石という鉱物は、意

外と身近にあるものなんです。
褐簾石という鉱物自体に、レア
アースが割と多く含まれている
んですが、今回発見した石が珍
しいのは、これまで知られていな
い種類のバナジウムが非常に多

く含まれているという点です。

学長 三重県伊勢市にある、昔
の小さな鉱山で見つかったとか。

永島 石を発見したのは地元のアマチュアの方なんです。「珍しい石があるから、ぜひ研究してほしい」と。石の中に脈が通っており、その中に数百マイクロンしかない鉱物が入っていたのですが、日頃から研究している私が見ても、すぐには分からない。発見した方の鑑定眼は本当にすばらしいと思います。

学長 地元でいつも見ているからこそ気付けたのでしょうかね。

永島 本当に。その方が石を愛媛大学に持ち込み、私が研究している分野の石だったので一緒に研究を、という話になりました。



2013.10 vol.18
Shimadai

島根大学広報誌
広報しまだい

■学長スペシャル対談

島根大学大学院総合理工学研究科卒業
山口大学大学院 理工学研究科 准教授

永島真理子さん 1

■第97回 日本陸上競技選手権大会(女子3000m障害)

荒井悦加選手が来校、優勝を報告！……… 5

■附属中学校との初の試みを実施

小林学長が附属中学校で講演 …………… 7

海外の文化に触れ、コミュニケーション能力を磨く そうすることで、グローバルな感覚が磨かれる

学長 ところで永島さんも学ばれた本学の地球資源環境学は、国際的にも評価の高い研究をたくさんしているんですよ。海外からの留学生も多いので、英語だけでやる講義もあるんです。

永島 たしかに、大学院生の半分は留学生でした。だから留学生と同じ部屋で生活し、様々な文化を肌で感じることができました。大袈裟に言えば、そういう

環境が私の人生を大きく変えたのではないかと思っています。

学長 本学ではグローバル人材の育成に取り組んでいます。本学の意味でのグローバルとは英会話ができる、ということではなく、様々な文化や思想を知り、人間としての幅も広げることではないでしょうか。

永島 そういう意味では、周りに常に留学生がいる環境は、と

ても貴重でした。私はドクターを取得した後、ドイツに1年半、スイスに2年半留学しましたが、島根大学時代に常に留学生と一緒にいたおかげで、気負いはありませんでした。

学長 英語は学問というより、あくまでコミュニケーションのためのツールです。だから、海外に出て自分がいかに英語が話せないかを知れば、自ら進んで勉強しようと思うはず。そういうモチベーションがないと、たとえどんなにいい教育を受けても身に付きません。だから私は本学の学生たちに、短期間でもいいからとにかく世界を見てきてほしいと切に思います。

永島 大学生くらいの年代の時に、留学したり、海外の学会に参加したりするのは大切なことですね。私は学会で同じような研究をしている人がいると、少しくらい言葉が通じなくても「今度一緒に何か研究しよう」「あなたの論文を送って」という感じで

自然と交流することができるようになりました。

学長 話は変わりますが、学部間のコミュニケーションについてはどう思われますか？

永島 垣根を越えた共同研究は大切だと思います。ただ、その垣根が想像以上に高くて苦労するんですけど、乗り越えれば、もっと多角的に物事をとらえることができるようになります。
学長 本学では今年から、学部を越えた卒業研究を始めました。というのも、すぐ隣にある他学部がどんなことを学んでいるか具体的に分からないし、知っていればもっとお互いの知識を活かして色々なことができるのではないかと考えたからです。そうすれば、1+1が2ではなく3になるかもしれない。大学全体としても、論文を増やせたり、一緒に研究を進めていくうちに共感できるようになる。
永島 確かに、大学内で誰がどういう技術を持っているか見えないことが多い。そういう事に関して相談できるところがあればいいだろうな、と思いますね。



「さ」と語る永島さん。自分が知りたいと思ったことは、とことん突き詰めます。

数々の神話伝説の残る島根だからこそ、地質学と考古学両方からの研究ができる



「ミクロのものからマクロのことが分かるのが、鉱物学の楽し

学長 そうすると、研究内容が

どんどん広がる。いま、永寫さんは山口大学で研究をされていますが、本学を含め他大学の研究室との連携も含めて、可能性が広がりますね。ちなみに島根県は歴史的にも地域学的にも恵まれたところですが、こちらでの研究はいかがですか？

永寫 島根にいた時はまだ学生だったので、独自性がある研究には至りませんでした。でも、今研究を進めている山口の鉦山とは、地質学的につながりがありそうですし、島根の研究をしていき

たいなと考えています。

学長 同じ鉦山の研究でも、島根だと出雲神話や歴史的な文献も残っているので、調査自体も面白く、調べやすいと思いますよ。ここには砂鉄が多く、斐伊川の砂鉄にもレアアースやレアメタルが結構含まれているとか。

永寫 実はいま、島根大学の赤坂教授研究室が島根・広島県境にある銀山を研究していますが、将来的に共同研究で調べようという話があります。地元の方が、ここには昔から銀山があって、すごいものを掘ってたんだという言

い伝えをご存知だそうで、すごく誇りに思っているらしい。だから、地元の方にも「皆さんが聞き伝えていたことは正しかったんですよ」と言えるような研究がしたいですね。

学長 本学では先日、「くにびきジオパーク・プロジェクトセンター」を設置しました。ここでは総合資源や歴史考古学、さらには医学や医薬など、本学の知的資産をフルに活用した研究を行うのが本来の役割なんです。みんな地質調査ばかり重点的に進めてしまう。地質の研究だけに留まらず、歴史と考古学が加わって、初めて古代出雲文化に

なるのではないのでしょうか。

永寫 確かに、昔の技術では発見できなかったものが、現代の技術で発見されるようになっていきます。古代出雲には銅鐸やたたら製鉄など、素晴らしい物がたくさん残っていますね。

学長 だから永寫さんにも、ぜひジオパークでの研究に関わっていただいて、古事記や風土記に載っている歴史が本場に正しいのか、最新の技術を駆使して地質学的に調べていただきたい。

永寫 とてもおもしろそうです。学長 ぜひ、うちの学生のお手本として頑張ってください。これからの活躍に期待しています。



小林祥泰／1946年生まれ、出雲市出身。慶應義塾大学医学部卒業後、島根医科大学医学部教授、島根大学医学部附属病院院長などを経て、2012年4月より島根大学長に就任。専門は神経内科学。

第97回 日本陸上競技選手権大会 **優勝** / 第20回 アジア陸上競技選手権大会 **4位** (女子3000m障害)

荒井悦加選手 (教育学部卒) が来校 (7月23日)、優勝を報告!

’09年のアジア陸上競技選手権大会・女子3000m障害で、日本人として初めて優勝したほか、中距離走競技の第一線で活躍中の荒井悦加選手。昨年に続き、今年も日本に輝いた報告のため来校された機会に、競技にまつわるさまざまな思いをお聞きしました。

小林学長に、喜びの声を!

6月に行われた日本陸上選手権大会・女子3000m障害で、本学・教育学部卒の荒井悦加選手 (エディオン) が、大会2連覇を達成。7月に日本代表として出場したアジア選手権 (於インド) の結果と合わせ、小林学長に優勝・入賞の喜びを伝えられました。

「日本選手権は2連覇ですが、昨年の優勝よりもうれしいです。というのも、去年はしっかり準備して出場できましたが、今季は故障で走れない状態になり、精神的に追い込まれた時期もありました。でも、焦る気持ちを切り替え、短期間でもできることに集中して臨んだ結果が2連覇に。苦労を乗り越えた分、喜びもひとしおです」と語る荒井選手。

小林学長からは、「おめでとう



第97回日本陸上競技選手権大会・女子3000m障害で激走する荒井選手 (左)。 (写真提供:エディオン女子陸上競技部)

ございます。これまでの精進の賜物でしょう。アジア大会では同種目で4位と、惜しくもメダルには届きませんでした。荒井選手の活躍は本学の、そして郷土の誇りです」と、ねぎらいの言葉が。

また、荒井選手が「これからは駅伝シーズン。個人競技からチーム競技となり、一人で走るレースとは違う醍醐味があります。ぜひ



荒井選手の今に迫る、一問一答

Q▼3000m障害とは？

〈荒井〉3000mを走り切る間に、水壕を含む障害を約80mごとに越えなければいけません。スピード持久力に加えて跳躍力・瞬発力も問われ、複合的な走力が必要な難しい競技だと思っています。

Q▼速くなった秘訣は？

〈荒井〉大学時代に力がついたと思いますが、それは地方の国立大学のチームだったからかも。小所帯で中長距離系の女子選手がいなかったこともあり、男子と一緒に長い距離を走り、必死に食らいついていきました。その時の練習のおかげだと思います。

Q▼日頃の練習は？

〈荒井〉地元の境港市や島根大学のグラウンドをお借りして練習させていただいています。学生と一緒に練習することはありませんが、誰かが頑張っている姿を間近にすると、元気をもらえるので助かります。

Q▼海外の大会で感じることは？

〈荒井〉日本選手権などでは勝ち負けが大切で、どうしてもピリピリとした雰囲気になってしまいます。しかし海外では、国を代表するプレッシャーの中で勝負という面はむしろありませんが、選手が皆、レースを楽しんでいる感じがします。

Q▼日本選手が海外で勝つには？

〈荒井〉日本選手は、国内での勝負が第一になりますが、「国内の大会は海外への通過点に過ぎない」というぐらいの気持ちで、普段から世界のレベルを考えながら練習することが必要でしょう。それと神経質すぎると、慣れない環境で精神的に疲れてしまいますので、ある意味、アバウトな感覚も必要かもしれません。

Q▼現在の所属チームでは？

〈荒井〉チームの本拠地は広島にあり、他のメンバーとはなかなか会えないとはいえ、合宿の際などには、年

長者としてのまとめ役を意識しています。チームは駅伝にも力を入れていますが、駅伝は団体競技。特に女子のチームでは、力を引き出せるかどうかはメンタル面がキーポイントですから、メンバーの気持ちが一つになるよう言動に注意しています。

Q▼今後の夢は？

〈荒井〉大きな目標を立てるといふより、目の前のレースに集中することだけを考えています。また将来のことはまったく未定ですが、子どもたちに陸上競技の楽しさを教えるなど、何らかの形で地元貢献していきたいと思っています。



今回の撮影用として、特別に日本代表のユニフォーム(第20回アジア陸上競技選手権大会時に使用)を着用して本学グラウンドをランニングしていただきました。



第20回アジア陸上競技選手権大会での荒井選手(上・左から3人目)(写真提供:エディオン女子陸上競技部)



ひチームも合わせて応援してください」と語られると、小林学長も「島根大学では、2年前に陸上競技場トラックを改修しましたし、今後も様々な面でバックアップしていきたいと思っています。好成績が残れば、島根大学をアピールできますし、何より地元の方々の方々の陸上競技への関心が高まればいいですね。これからも頑張ってください」とエールを送りました。

本学OG 荒井選手の、さらなる活躍を期待しています。

附属中学校との初の試みを実施

小林学長が附属中学校で講演

島根大学教育学部附属中学校では、総合的な学習の時間を「F-I-T」と名付け、生徒の成長にとって大切な学習活動の一つとして取り組んでいます。その一環として、7月3日、2年生の生徒を対象に「自分自身の生き方を学ぶ」と題した講演会が行われ、小林学長が登壇しました。



島根大学教育学部附属中学校では、2年時の2学期になると、市内のさまざまな職場で3日間の職業体験学習を行います。今回の小林学長の講演は、職場体験の前に各界で活躍している人の話を聞き、生徒たちの意欲を高める、というものです。約130名の生徒を前に、医療現場の現状やこれからの人生において大切なことなどについて熱く語りました。

命の尊さと真摯に向き合おう、それが医療の現場

医療の現場といっても、医師や看護師、薬剤師やリハビリテーターシオン関係など、職種は多岐に渡ります。その中で学長が特に多くを語ったのは、医師と看護師についてでした。

できれば、いのちを支える厳しい現場である救急や内科、外科などを積極的にめざしてほしいこと。看護師は夜勤など心身ともにハードな仕事もあり、結婚や出産を機に辞めていく人も多いため、これからは男性看護師の活躍の場が増えるかもしれないこと。そして、より高度な看護を



「世間に飛び交う情報の中から、本当に正しいことは何かを判断してほしい」とメッセージ。

提供するために「がん看護専門看護師」や「認定看護師」などの専門職が増えていること。自らも医師としての経験を持ち、医学部附属病院で医療の現場を見てきた小林学長ならではの、リアルな現状が語られました。

好きこそものの上手なれ、 興味を持つことを第一に

一方で、学校の授業以外の「勉強」の大切さにも言及。なぜなら、実際に世の中で活躍できる人になれるかどうかが本当の勝負になるからです。

自分が好きなことなら夢中になれるし、勉強の面白さがまるであつてくる。狭い世界で固まらず、まずは好きなことや得意なものを見つけて、自分に自信が持てるようになってほしいと語りました。

グローバル感覚を持つと、 日本の、島根の良さが見えてくる

また、社会で生活していくうえで、「コミュニケーション」はとても重要です。そういう意味では、世界中の人と意思の疎通ができるようにするために、とにかく一度外国に行ってみなさい、というのが学長の持論です。なぜなら、自分がいかに英語ができないか気付くことが大切であり、さらには言葉が通じない中でどうすれば他人と分かり合えるようになるか知ることが重要だからです。



普段はなかなか聞けない医療現場の話など、生徒たちは皆真剣に聞き入っていました。

住んでいる場所や環境が違って、考えていることは皆一緒だと理解することができ、それが「グローバルな人」。世界の中で「日本人である自分」を意識することは、日本の、そして島根のすばらしさを自覚することにもつながると学長は語りました。

今回の学長の講演会は、生徒たちに、自分の将来について真剣に考えるよい機会となったようです。

小林学長の講演を聴いて

島根への想いを深めながら、
自分の将来を模索してほしい



島根大学教育学部
附属中学校
佐々有生校長

本校には、将来医療関係の仕事に就きたいという生徒が多数います。生徒たちにとって、医療関係者の話を生で聞くのは今回が初めてでしたが、小林学長の話は単なる医療に留まらず、ふるさと島根に対する思いまでもが伝わってきました。ここで生まれ育った生徒たちにも、将来の生き方の選択肢のひとつに「島根」というものを頭に入れてもらえたらと思います。

また、大学の設備に触れるのは生徒たちにとってよい刺激になります。今後も附属中学校というメリットを活かし、大学の他学部とも交流していけたらと思います。

保護者さまの感想

実体験に基づく学長の話は、説得力がありました。さまざま垣根を越えて新しいことに挑戦し続ける姿を、子どもたちにも参考にしてみたいです。(Kさま)

努力して自信をつけ、
自分自身を成長させたい

将来、医療関係の仕事に従事したいので、実際に現場で活躍されていた学長から直接、医療の現状について話を聞いたのは、とても貴重な体験になりました。「ひとつのことにとらわれず、幅広い視野で物事を考えることが大切」「努力して自信を持つことで成長することができる」という話が強く印象に残っています。



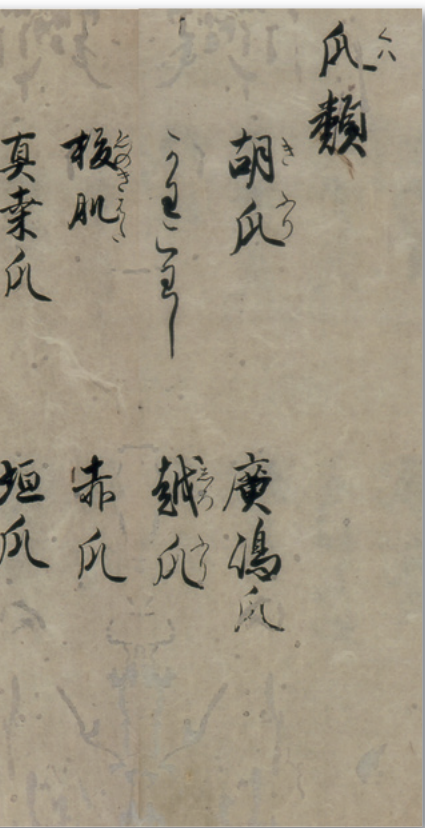
三原寛貴さん(2年生)

グローバル感覚を身につけ、
夢に向かって頑張りたい

医療というと理系のイメージで、技術的なことが重要なのだと思うので、「医療に大切なのはコミュニケーション」という学長の言葉はとても意外で驚きました。将来は英語教師をめざしているので、「グローバル感覚を身につけなさい」というアドバイスを参考に、何にでも積極的に取り組んでいきたいです。



小川歩未さん(2年生)



日本語の歴史を明らかにするために、過去の方言を未来へ残したい

「方言」と聞くと、地域独自の話し言葉を想像しがちですが、動植物にも方言名があるのをご存じですか。300年近く前の、出雲の方言語彙について伺いました。

法文学部 言語文化学科 教授

たごもり ひろし
田籠 博



過去の文献に残る方言語彙を収集し、現代の方言分布の生成過程を研究しています。出雲の古い文献には、既に日本では絶滅してしまったコウノトリやトキの名前が載っており、出雲の空を舞う姿を想像するのも文献の楽しみ方のひとつです。

約3000年前の文献から、当時の出雲方言や自然が見えてくる

現在使われている方言については、多くの調査によって分布状態が明らかにされてきたが、歴史的にさかのぼるのは大変難しいとされている。なぜなら、各地で書かれた古文書は数多く残されていても、そこで用いられている用語や表現は、日本中どこでも通用するような言葉で記されているからである。そこで田籠教授が注目したのが、1735年頃に作成された『産物帳』だ。

「中国の書物に載っている動物や植物の記事を調査し、分類・編集した『庶物類纂』という博物書があるのですが、その調査過程で、全国の産物を記録する『産物帳』が作成されたのです」（田籠）。しかし各藩からの提出された産物帳の記載には、名称だけではどのような動植物か分

からないものがあつた。そこで改めて絵図や形状の説明を添えさせると、全く同じ動植物なのに、地域によって呼び名が異なる、つまり珍しい方言名があるということが分かったのだ。

「例えば南瓜（カボチャ）の方言名を見ると、石見地方や鳥取県では『ボーブラ』系の語が分布しているのに、出雲では『南瓜（カボチャ）』と『ボーブラ』が別種のよう

に記載されています。つまり南瓜（カボチャ）は決して標準語の流入ではなく、古くから存在した。出雲方言であることが分かるのです。」（田籠）。出雲国産物帳からはその他にも、もぐい（カタツムリ）、イボジリ（カマキリ）、フムゼウ（トンボ）、あさとり木（アキグミ）などの出雲方言名を見いだすことができた。

言葉は、常に変化するものだからこそ、各地の方言集の迅速な作成が必要

また、産物帳と同時期に作られた『産物絵図註書帳』（特定の産物について作られた絵図と説明書き）にも、出雲方言を見る

ことができる。

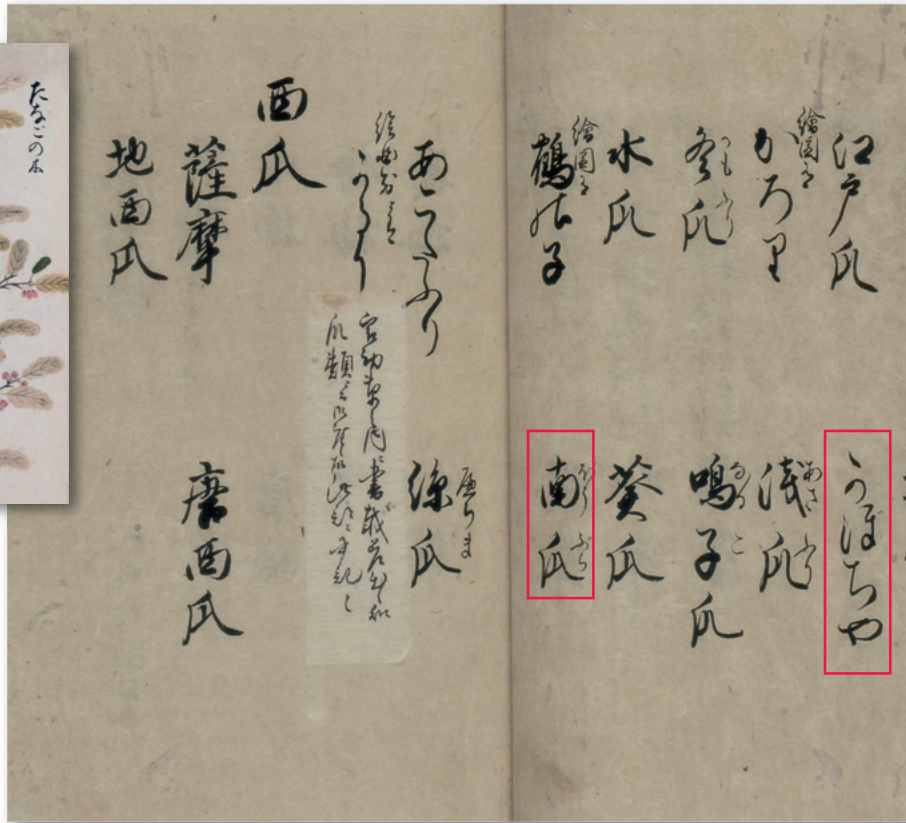
「例えば『フトイ』と『ホソイ』。普通に読み過ごしてしまいがちですが、絵図註書帳の文章から『フトイ』大きい『ホソイ』小さい」という意味で使われていた



左は「能儀郡絵図註書帳」の「あさとり木」、右は「隠岐国絵図註書帳」の「たなごの木」。絵図を見ると、方言名は違っても、同じ「アキグミ」という植物であることが見てとれます。



◀田籠教授による「出雲国産物帳」に関する著書。研究の集大成として出版された。



『出雲国産物帳』より。出雲地方では約300年前から「南瓜(カボチャ)」という言葉が使われていたこと、また当時の人は「南瓜(カボチャ)」と「ポーブラ」は2つの異なる種類の瓜だと考えていたことが分かります。

注目キーワード

薬の学問の資料としてはもちろん、
当時の方言を辿ることができる「本草書」

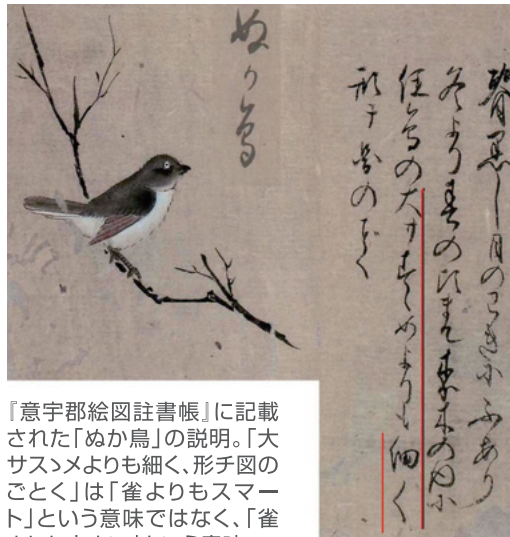
田籠教授の研究課題の一つである「本草学(ほんぞうがく)」。中国で発達した薬物についての学問で、日本では江戸時代に最も発展した。本草学についての知識をまとめた「本草書」を読み解くにあたり、日本の本草家たちは「書に書かれている中国の薬物は、いったい日本のどの植物に当てはまるのか」を調べる必要があった。

このように、本草家たちの研究過程において、日本国内でも地域によって同じ植物の呼び名が異なることが判明。本草書は産物帳同様、当時の方言語彙を探る貴重な資料となっている。

ことが分かります。そしてこの『ホソイ』は、現在も『ホソエ』と言いつつ方を変えながら使われ続けていることが分かりました(田籠)。

しかし、方言語彙は急速に変化しているのも事実。マスメディアなどの発達により、一時代前のものは、次々と新しい言葉に置き換えられている。だからこそ「日本各地に残っている方言を記録していきたい」と語る。

「300年近くも前の言葉が、書物で確かめられるのは素晴らしいこと。今後は『庶物類纂』に出てくる方言記事を利用しやすい形で提供できるようにしたい。また、



『意宇郡絵図註書帳』に記載された「ぬか鳥」の説明。「大サスメよりも細く、形ち図のごとく」は「雀よりもスマート」という意味ではなく、「雀よりも小さい」という意味。

本草書(左記「注目キーワード参照)の中の方言も研究できた」と目標を語った。

※掲載の資料はすべて島根県立古代出雲歴史博物館の所蔵提供



看農連携・看工連携で 介護する側もされる側も 笑顔になれるケアを提案したい

これまであまり例を見ない「看護学と農業の連携」により、「第7回モノづくり連携大賞」特別賞を受賞。研究のきっかけや取り組み内容について伺いました。

医学部 看護学科 教授

はら さちこ
原 祥子

わたしの研究の原点は、看護師としての9年間の実務経験です。勤務していた急性期病院で入浴介助をしていたとき、ある患者さんから「あんたも(お風呂に)どうかね」と言われたときの、ふっと肩の力が抜けて癒された瞬間は、今でも忘れられません。



看護学と農業という 異色の組み合わせから生まれた、 「ローズ水」を用いた芳香療法

島根県の高齢化率は全国第二位であり、85歳以上の認知症有病率は40%を超えると言われていた(厚生労働省研究班の調査による)。

原教授の専門は、老年看護学。高齢者とその家族、そして介護スタッフを笑顔にする心地よいケアについて研究していた折、奥出雲蓄微園の社長と出会った。

「医療・福祉領域で心身の痛みを持つ高齢者に対して、蓄微を役立てられないか」という思いを受けて始まった共同研究の末、誕生したのが「認知症高齢者の入浴ケアにおける『さ姫』ローズ水を用いた芳香療法」だ。

「介護老人保健施設のケアスタッフにとって、認知症高齢者の入浴の援助は、困難を感じる場面のひとつ。なぜなら、認知症高齢者の中には羞恥心から入浴を

拒否する方や、体調不良を上手く伝えられずに攻撃的な行動をとる方もいらっしゃるからです」

(原)。そこで、攻撃性や興奮等の心理・行動症状を緩和する芳香療法に注目。認知症高齢者が入浴を開始する約10分前から、脱衣室と浴室にリラクゼーション作用をもつローズ水を気化式加湿器で散布したところ、対象者が穏やかな感情になることが分かったのだ。それにより、ケアスタッフの負担も軽減されることが窺えた。

この研究は、独創的な産学連携モデルを表彰する「第7回モノづくり連携大賞」において特別賞を受賞。「あまり例を見ない『看護学と農業の連携』という点が評価されたようです。私としても、地元・島根の地域力を発見・向上できたことがとても良かったと思います」(原)。

認知症高齢者の語りを引き出す、 看工連携によるソフトの開発をめざす

原教授のもうひとつの取り組みに「スマートライフストーリーシstem」の開発がある。これは高齢者の語りを引き出すソフトの開

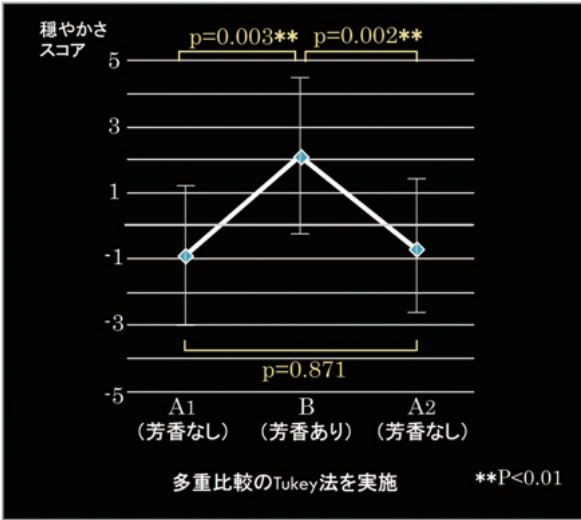
発で、本学大学院総合理工学研究所と連携した研究となる。

「高齢者が人生を振り返り、他者に話したり書いたりする行動



奥出雲薔薇園独自の薔薇「さ姫」から作ったローズ水を、気化式加湿器で散布。

「ローズ水」を用いた芳香療法による感情評価の平均値。芳香ありの時「穏やかさスコア」が高くなることが分かる。



第7回モノづくり連携大賞」表彰式&記念フォーラム

主催 日刊工業新聞社 モノづくり日本会議



「第7回モノづくり連携大賞」表彰式にて。左から、中村教授(産学連携センター)、原教授、竹田助教(看護学科)、福間社長(奥出雲薔薇園)

注目キーワード

高齢者のクオリティオブライフを高め、 健やかに老いるための「老年看護学」とは？

「老年看護学」とは、人生の最終章である老年期を、いかに楽しく幸せに、その人らしく生きていくかということを考える学問で、少子高齢化という社会の流れを受けて誕生した。

高齢者といっても、健康な方から疾病を持った方、要介護や認知症など、身体機能は人それぞれ。その特性や社会生活を理解し、健康とクオリティオブライフを高める援助、あるいは穏やかな死を迎えるための援助の基礎となる理論的知識と技術について学ぶ。さらには、高齢者を支える家族のサポートも重要な課題のひとつ。これからの高齢社会において、ますます重要度が高まっていくことが想像できる。

が自尊心を高め、自身の肯定につながります。実際に、高齢者の言葉数が多くなったり、イライラが解消されたりするケースが確認でき、ケアスタッフとの関係が円滑になることも(原)。ケアスタッフからも「高齢者の過去の生活をイメージしやすいので、話のきっかけや話題が広がる」との声が。そのため、高齢者から話を引き出すノウハウを介護現場で普及させるためのソフトを、2年後をめどに開発中だ。タブレット端末に写真などを表示しながら、スタッフが高齢者の語りを円滑に引き出せるノウハウを詰め込んだものになる計画。



高齢者の語りを引き出すソフト開発を紹介する新聞記事。各メディアで取り上げられ、注目度の高さが伺われる。(写真は2013年1月11日山陰中央新報)

究』ではなく『高齢者一人ひとりの生活を豊かにするための研究』を続けていきたい。そのためには、手間やコスト面まで考え、暮らしの中で継続できるようなシステムを提供できたらと思います(原)。

留学生たちの島根への想いを聴く

学長と学生のランチミーティング開催



国際交流を推進する本学では、アジアを中心とした国々から約170名の外国人留学生を受け入れています。

8月9日、留学期間を終えて帰国する留学生たちと小林学長によるランチミーティングを開催しました。最初はやや緊張の面持ちを見せていた留学生たちでしたが、学長からのユーモアを交えた問いかけに思わず笑顔に。帰国前のひととき、島根大学での貴重な体験を語り合いました。

それぞれの目標に向かって 頑張った留学生たち

学長 皆さんが島根大学に留学した目的は？

アサド バングラディシユでは研究所で働いているのですが、私の研究内容と浅尾教授の研究内容が同じ(腎機能が低下している方にも食べられる低カリウムメロン栽培)だったので、農業を学びに来ました。島根大学では結局、5年間勉強させていただきました。

リヨウ 日本語をきちんと学んでみたくて、協定校である島根大学に来ました。

チヨウ わたしも同じです。わたしが行く中国の南京林業大学から島根大学へは、わたしが久しぶ

りの交換留学生と聞きました。

ユリア トリア大学で日本語を学んでいましたが、日本で本格的に勉強しようと思ひ、島根大学への留学を決めました。

エレナ わたしもユリアも、ドイツで日本語を2年勉強してから島根大学に来ました。

ランチミーティングに 参加した留学生



アサドゥザマンエムデイさん
(Asaduzzaman MD.)
バングラディシユ出身 / 博士3年

勉強、文化、人との交流 すべてが貴重な体験に

学長 島根大学で勉強してみてもうでしたか？印象に残ったことなどあれば教えてください。

アサド 先生には研究だけでなく日常生活の面でも随分サポートしていただき本当に助かりました。また、農業の研究では、リーダーとして仲間たちと協力して頑張ったのが一番の思い出です。

リヨウ 日本に来てすぐは、日常会話が苦手でしたが、友だちができてからは上達できたと思います。日本語を勉強してからは日本の文化にも興味が出て、同じアジアの国でもこんなに違うのかと驚きました。

チヨウ 授業の初日にグループディスカッションがあったのですが、中国では大人気で意見を交えるような授業はあまりないので、すごく驚いたのを覚えています。あと、先生と生徒の距離が近く、親身になって相談にのっていたので心強かった。とても感謝しています。



それぞれの国の文化や食の話題も飛び出し、笑い声の絶えないランチミーティングとなりました。

ユリア それは私も感じました。ドイツでは、先生と生徒に一定の距離がありますから。日本語の授業はどれも本当に楽しかったですが、休日に山陰の色々なところに出かけ、文化や自然に触れることができたのも貴重な体験でした。

エレナ 何気ない日常生活の中にも楽しいことがいっぱいありました。例えば、みんなで学食に集まって朝食を食べたり、一緒に勉強したり、トルコやインドネシアなど他国の留学生とも交流できたのがとても良かったと思います。

学びを活かした 次のステージへ

学長 皆さん、これから自国に戻られますが、これからの夢や目標を聞かせてください。

リヨウ 留学中に興味を持った日本文化について、中国でも引き続き学んでいきたいです。

チヨウ 私は、日本の企業に入るのが夢です。将来的には日本で働けたらいいなと思っています。

ユリア わたしは日本の大学院に行ってみたい。そして、せっかく学んだ日本語を活かせる仕事に就きたいと考えています。

エレナ まだ自分が何をしたいのか分からないけど、いつか日本に戻ってきたい。それに色々な言語を勉強したので、フランスへの留学にも憧れています。

アサド 島根大学で学んだ先進的なテクノロジーを活かして、自分の研究所を作るのが目標です。そこで人の役に立つ研究をしたいと考えています。

学長 将来が本当に楽しみです。ね。本学での貴重な体験を活かして大いに活躍してください！



エレナ アダシェフスキさん
(Elena Adaschewski)
トリア大学(ドイツ)からの交換留学生



ユリア アンゲラ ハレンスレーベンさん
(Julia Angela Hallensleben)
トリア大学(ドイツ)からの交換留学生



チヨウ リンさん
(張 琳)
南京林業大学(中国)からの交換留学生



リヨウ トクデンさん
(梁 徳田)
東北林業大学(中国)からの交換留学生

しまだいい

島大の多彩な動きを
チョイスしてお伝えします！

トピックス

掲載記事以外にも、島大には話題がいっぱい！
ぜひ、ホームページもご覧ください。



交流を推進し、より一層の連携強化を

慶尚大学・島根大学夏期研修 交流20回記念式典を挙行

韓国慶尚大学校と本学は、1991年の大学間協定締結後、相互に夏期研修を実施してまいりました。7月1日、慶尚大学校の



本学訪問が20回目となることを記念した式典を行いました。式典には、慶尚大学校から学生18名とJ.E.O.N.G., W.O.O.I.G.E.O.N副学長をはじめとする4名の引率者、そして毎年研修生を受け入れていただいている雲南市国際交流協会の藤原事務局長が参加。今後の連携強化と、交流の推進が確認されました。今回の夏期研修で、慶尚大学校からは延べ295名が、本学からは延べ216名が夏期研修に参加したことになります。

地域活性化と人材育成を推進

大田市と包括的連携に関する 協定を締結

7月11日、大田市役所において、本学と大田市との包括的連携に関する協定の締結式を行いました。この度の包括的連携に関する協定の締結は、人材の育成及び研究成果等の活用等について、より一層相互に緊密な連携・協力を推進していくものです。



締結式で竹腰創一大田市市長は「島根大学と連携し、活気あるまちづくりに努めていきたい」と挨拶。小林学長も「石見銀山遺跡等の資源を活用した地域の抱

点づくりや、地域活性化に貢献できる研究、人材の育成を進めたい」と述べました。

災害対策拠点としての機能を強化

電気自動車納車式を実施

災害対策の一環として、電気自動車(日産リーフ)を松江・出雲キャンパスに各2台・計4台導入し、6月27日、松江キャンパスで納車式が行われました。本学が地域住民の指定避難場所であるこ

とから、地震などの災害による停電時の非常用電源を確保し、災害対策拠点としての機能を強化するため導入したものです。当日は、小林学長及び日産サテリオ島根・櫻井社長の挨拶に

熱中・夢中!
島大・1年生の
大学生活を直撃!



子ども(特に中・高校生)との交流を深めたい。
久保田 悠梨乃さん / 教育学部



一人暮らしで上達した料理を実家で披露したい。
三浦 壮太さん / 生物資源科学部



病院ならではの行事に積極的に参加したい。
畠 准子さん / 医学部

医学部附属病院にて医療の現場を体験

附属中学校2年生が「中学生地域医療現場体験」に参加

7月29日、医学部附属病院にて「中学生地域医療現場体験」を行い、本年度初めて教育学部附属中学校の生徒(2年生13名)も参加しました。

この事業は、医療の現場にふれることで、生命の尊さや医師・看護師等の職業の重要性を理解し、地域医療従事者をめざす中学生を育成することが目的です。



当日は手術や小児センターの見学、内視鏡手術トレーニングを実施。参加した生徒は「内視鏡手術のトレーニングは、距離感がつかめず難しかった。将来は医療現場で働きたいので、いろんな経験をして力をつけたいです」と充実した様子。中学生にとって、今後の生き方や進路選択を考える貴重な一日となりました。



人材発掘、地域貢献につながる交流の場

県内企業と留学生の懇談会を開催

7月10日、本学と松江商工会議所の共催で、県内11社の企業と東南アジア地域からの留学生14名との懇談会を松江キャンパスにおいて初めて開催しました。

この懇親会は、留学生と地元企業双方のコミュニケーションをとる機会として企画したものです。日本企業の先進技術やビジネス習

慣を身につけ、将来母国の役に立ちたいと思う留学生の就職などに役立てることができればと開催されました。

各企業からの自社紹介や各国代表学生によるプレゼンテーション、そして企業と留学生の活発な意見が交わされ、双方から「貴重な情報交換ができてよかつ

続き、総合理工学研究科の山本真義准教授が観光用馬車型電気自動車を紹介。また試乗会では、参加者が電気自動車の乗り心地を体験したり、充電方法等の説明を受けました。今後、両キャンパスに電気自動車から電力を供給するためのEVパワーステーションの設置を予定しており、平時には環境に優しい公用車として、災害発生時には物資等運搬用又は非常用電源として活用する予定です。

た」との感想が聞かれる、充実した懇親会となりました。



読者の声

「広報しまだい」前号(vol.17)に寄せられた声を届けます。

孫がお世話になり感謝いたしております。島根大学生には大きな夢と希望を持ち、学業に取り組むようエールを送ります。

(京都府京丹後市・Aさん)

今回の学長対談の相手は誰かな?と、毎回楽しみに読んでいます。一人でも多くの島大生の声を聞きたいです!

(島根県出雲市・Iさん)

松江市の歴史や自然を、1年生が調査

ソーシャルラーニング授業の

公开发表会を開催

7月16日、本学1年生対象の授業「スタートアップセミナー」の公开发表会を松江キャンパス教養講義室棟にて行いました。スタートアップセミナーとは、松江市の歴史や観光資源などに



ついて調べ、理解を深めると同時に、自主的な学びを身につけることを目的とした授業です。学生たちは「川・堀」「町並み」「城」「ホーランエンヤ」等の7テーマからグループごとに調査対象を選び、文献調査や現地調査を進めてきました。

発表会は、学部が異なる学生と協力して行ってきた調査結果を持ち時間4分で発表するもの。多くの学生にとって初めての体験でしたが、短い時間でしっかりと成果を発表しました。また、質疑応答にもはきはき応じ、文献やフィールド調査の深さと、発表練習の積み重ねを感じさせていました。

「松江城はなぜ国宝にならないか」「松江にお茶の文化を流行らせた不昧公はどんな藩主だったか」など、松江での生活が短い1年生ならではの視点も随所に盛り込まれた発表でした。

グローバルな感性を養成するために

平成25年度外国語科目

成績優秀者表彰式を開催

6月14日、外国語教育センターワークショップセッションにおいて、松江キャンパスの外国語科目成績優秀者表彰式を行いました。

本表彰式は昨年度(平成24年度)に英語及び各初修外国語で優秀な成績を収めた方々を表彰するものであり、小林学長から受賞者に励ましの挨拶がありました。表彰式後は昼食を取りながら懇談が行われ、和やかな時間を過ごしました。

また6月19日には、出雲キャンパスの昨年度TOEIC I P 成績優秀者(高得点部門・得点伸

び率部門

各2名計

4名)の

表彰式を

出雲キャン

パスで

リックで

行い、外

国語教育

センター

長より表

彰状及び

記念品が

授与され

ました。



地元小学校の総合学習をお手伝い

川津小学校の児童が島根大学を見学

松江市立川津小学校の3年生34名が、6月25日に松江キャンパスを訪れ、大学構内や施設を見学して回りました。小学校の

「総合的な学習の時間」の活動として、自分の住む川津の町について調べる学習の一環で行われているものです。

「研究・地域貢献事業紹介」は、島根大学の動きが良く分かります。これから進学する県下の高校生意見も聞かれた広報づくりをされると良いと思います。

(島根県松江市・Kさん)

ほとんど勉強していなかったような気がする大学生活でしたが、やはり島根大学は我が母校!今の母校を知るの、これからのエネルギーになります。

(愛知県岡崎市・Yさん)



島根県の拠点病院として地域医療に貢献

医学部附属病院 再開発完成記念式典を挙行

平成20年度の新病棟着工から5年にわたる病院再開発事業を終えたことを記念し、6月1日、本学医学部附属病院において病院再開発完成記念式典を行いました。

式典には、島根県選出の国会議員をはじめ文部科学省、島根県、出雲市、大田市、関連病院、自治協会、企業各関係者など約120名が出席されました。初めに本学井川病院長から、

続いて小林学長から挨拶があり、島根県の拠点病院として本院の果たす役割について今後の抱負を述べました。引き続き、文部科学省大臣官房文教施設企画部長坂技術参事官をはじめめとする、来賓の方々から祝辞があり、本院へのさらなる期待の言葉をいただき、本院の新たな門出を祝いました。

また、井川病院長より病院の施設概要の説明や、小児センター病棟や手術ロボット『ダ・ヴィンチ』、救命救急センター等の施設をめぐる病院見学会も実施。最後に本院食堂ラパンにおいて祝賀会を開催し、盛大な式典を締めくくりました。

見学に訪れた児童たちは、ミュージアム本館展示室や山陰地域資料展示室にある貴重な化石や標本を見学したほか、今年4月にリニューアルオープンした図書館では本の多さや小学校にはない設備に驚いていました。さらに、総合理工学部3号館11階から松江市内を見渡し自分たちの家や小学校などを探したり、大学内の施設を上から眺めたりしていました。



「石があるの?」「図書館には何冊の本があるの?」などの質問をしたりと、普段とは違う環境に興味津々な様子でした。

本庄総合農場

「秋の農場一日開放日」 のお知らせ

農場では「心身ともに豊かで質の高い国民生活を実現する農業生産をめざした研究、人材育成、そして地域貢献の推進」を目標にしています。一日開放日には、教育・研究紹介、農業体験、試食、関連生産物の販売等を行う予定です。この機会に是非お越しください。

- 期日：平成25年11月2日(土)
- 時間：9:00～12:30(予定)
- 会場：島根大学生物資源科学部
本庄総合農場 ※MAP参照
(松江市上本庄町2059)
- お問合せ先：0852-34-0311
(生物資源科学部・本庄総合農場)

一畑バス「美保関ターミナル」行き、旭の森(ひのもり)停留所下車。農場入口まで徒歩5分、主会場まで約15分。

会場は入口から約800メートル入った小高い所です。



読者の声

最近の若い方の考えなどが分からないので、ぜひ「広報しまだい」の中で高齢者と学生達の話合いの場を設けてほしいです。
(島根県松江市・Yさん)

バラエティ豊富な内容ですね。今度はぜひユニークな特長や個性躍如する教授や職員の方を紹介してほしいです。
(島根県安来市・Aさん)

「学生プレス

研究会」始動

6月13日、本学と山陰中央新報社は、産学連携による人材育成を目的に包括連携協力協定を締結しました。学生の情報収集・分析や文章力・コミュニケーション能力向上のため、本学の授業や課外活動「学生プレス研究会」を山陰中央新報社が支援します。

松江キャンパスでの協定調印式で、小林学長は「学生の情報発信能力を高めていく意義は大きい」と挨拶。森脇徹男山陰中央新報社社長も「島根県の良さを発信してほしい」と



期待を寄せました。学生プレス研究会は今後、本誌で「学生プレス研究会」を連載するなど、幅広く活躍する予定です。

島大生記者による、島根の今をお届けします

学生プレス研究会

Vol.1

被災地に届け、みんなの元気 「津和野を応援し隊」が募金活動

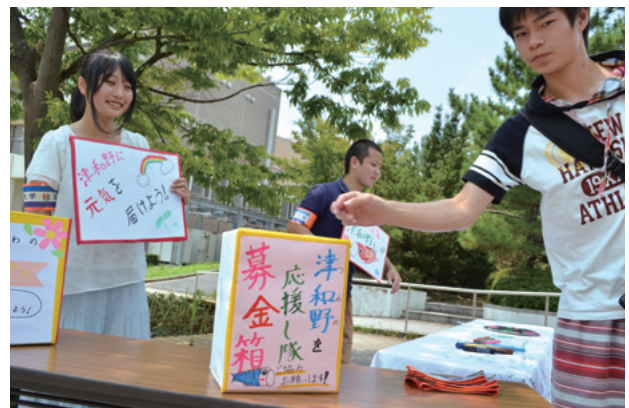
豪雨被害を受けた島根県津和野町の復興に役立ててもらおうと松江キャンパスで8月2、6日、学生有志による募金活動が行われました。集まった募金5万7673円は7日、同町日原出身の山根駿介さん(生物資源科学部1年)が、津和野町の長嶺



常盤副町長に「がんばれ！津和野」などのメッセージが書かれた横断幕とともに手渡しました。

記録的な豪雨に見舞われた津和野町が床上浸水や道路の寸断などの被害を受けたのを知った坊将一さん(生物資源科学部3年)ら7人が「津和野を応援し隊」を結成。「津和野へ元気を！」などと書いた手作りの募金箱を手に昼休みの1時間、「皆さんの元気を津和野に届けてください」と食堂前の広場で学生や職員に募金を呼びかけました。3日に本学で開かれた国文学会にも募金箱の設置を依頼し、多くの協力を得られました。

津和野町へのメッセージも受け付け、学生や職員が次々と横断幕に応援の気持ちを記入す



る中、駆け付けた小林学長も募金とともに「鯉と鮎が戻るよう祈ります」と書き込んでいました。

津和野町出身の寺戸愛さん(教育学部2年)は「何もできないのがいやだったので、少しでも役に立てるように、との思いから募金活動に参加しました」とし「風評被害が心配です。ぜひ津和野に観光に来てほしい」と話していました。(学生プレス研究会・福島達也)



地域での人材育成と交流を活性化！ 「サテライトキャンパス雲南」設置

島根大学では、包括連携協定を結ぶ雲南市で多くの教育活動を行ってきましたが、今後の全学的な展開に向け、6月24日「島根大学サテライトキャンパス雲南」を開設。速水雄一雲南市長と小林祥泰学長による看板の上掲式が行われました。

事務局は、雲南市木次町の市勤労青少年ホームに設置。同市の自然・文化・歴史・産業などを教材として活用するほか、地元の講師探しや民泊先などの調整役となる地域コーディネーターを市民に委嘱し、地域との密接な関係づくりも推進。地元の方々ととの交流を通じ教育を行うこと

で地域貢献型の人材育成を進めるとともに、地域社会の活性化への寄与を目ざします。

速水市長は、「学生はもとより雲南市民の学びの場にもなり、地域の魅力を再認識して、新たなまちづくりの機会になることを期待したい」と話され、小林学長は「従来の大学キャンパス内での座学とは異なり、実学的な観点からの学びで、学生の就業力育成も強化したい」と述べました。

今後、松江市・出雲市のキャンパスのほかに、各所に地域密着型の教育拠点の設置を推進。より幅広く柔軟な教育活動展開に、地元の期待も高まります。



上/事務局前にサテライトキャンパスの看板を掲げた速水雄一雲南市長(左)と小林祥泰学長(右)。下/地元新聞社・放送局も多数取材に。期待の大きさを示しています。



小林学長、サテライトキャンパスの実習予定地「食の杜」を訪問

奥出雲の風土に根ざした農業の実践と農産加工品の製造で注目される雲南市の「食の杜」。当所で「サテライトキャンパス雲南」の教育科目である観光実習も予定されていることから、看板上掲式に引き続き、小林学長が訪問しました。

「食の杜」内のワイナリー奥出雲葡萄園では、本学農学部OBの安部紀夫ワイナリー長から、醸

造施設やブドウ畑等について説明を受けながら見学。ブドウ育成もワインづくりも、ゼロから挑戦しながら地域おこしを实践されている現場の生の声に、サテライトキャンパスでの地域密着教育の確かな手応えを感じられたようです。



安部ワイナリー長からの説明を聞く小林学長。



荒れた森林を元気にしよう!
私たちは森林保全の輪を広げる活動を展開しています。

みんなを
まもろう!

山陰合同銀行

島根大学オリジナル芋焼酎
神在の里 好評発売中

生物資源科学部神西砂丘農場で生産されたサツマイモ「ベニアズマ」を原材料とした「芋焼酎」

●神在(かみあり)の里(720ml) 2本入りセット...3150円(税込)

島根大学生協同組合
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 Tel.0852-32-6240
http://omise.seikyuu.jp/shimane

印刷テクノロジーで、
世界を変える。

TOPPAN

凸版印刷株式会社 www.toppan.co.jp
松江営業所 〒690-0887 島根県松江市殿町383 山陰中央ビル7F

松江キャンパス

〔茶道部〕



部員倍増で活気あふれるメンバーたち

小さな気配りと思いやりで
そっと心に寄り添うようなお茶席を

たとえ茶道の心得がなくても、自然にくつろぎの世界に誘われる同部の茶会。そこには部員たちが常日頃から心掛ける気配りと思いやりが息づいています。

練習は週2回。通常の指導は先輩学生が行いますが、時折、学外から茶道の先生を招くことも。

昨年はアメリカのニューオリンズ市で開催されたジャパンフェスタや松江市にある華蔵寺記念茶会への参加、ウオークラリー大会での茶道の指導役と学外も活躍の場に。

今年は部員数が倍増し、発表会を兼ねた茶会を毎月開催したいと意欲的です。

「お茶会準備には決めなければなら

ない事が多いので、みんなが意見を出し合えるような雰囲気をつくっていきたいですね」と代表の川又千夏さん(生物資源科学部2年生)。

昨年の大学祭茶会のテーマは「神話」。さて今年はどうなテーマが生まれるのでしょうか。

程よい緊張感と和やかに包まれた稽古のひとコマ。



出雲キャンパス

医学部〔剣道部〕



部員一人ひとりが輝かしい伝統の継承者

日々の精進で培った技と精神力で
輝かしい伝統を受け継ぐ

2008年、西日本医科学学生総合体育会の団体戦での男女アベック優勝など輝かしい戦績を残し続ける医学部剣道部。

昨年の同大会では女子が団体戦、個人戦ともに優勝。一方、男子は悔しい結果に終わり、「精神面から鍛え直し、底力を養わなければと感じました」と部長の重辰徳さん(医学部4年生)。学内外の指導者に相談しながら練習メニューを練り上げ、技と精神面の強化に取り組んできました。

指導に訪れる卒業生からも貪欲に吸収し、「先輩方の精神力の強さ、試合への向き合い方を感じ取ることができました」と女子部キャプテンの井上智子さん(看護科4年生)。

マネージャーの存在も大きく、きめ細やかな配慮でプレーヤーの集中力を高めています。

日々の努力を糧に勝利をつかむとともに、偉大な伝統も受け継ぎたいと意気込んでいます。



一瞬たりとも気を抜かず、気合十分に練習に励む部員たち



島根大学は、島根スサノオマジックを応援しています！



神話第四章、今年も隠岐の島から開幕!!

2013年9月7日(土) 島根スサノオマジックの神話第四章がいよいよ始まりました。プレシーズン初戦の舞台は昨シーズンに引き続き、隠岐の島町「隠岐の島町総合体育館」。移動式バスケットボールリングを所有している体育館は県内に3つあり、その1つがこの隠岐の島町なのです。

本来は公式戦が行えるほどの立派な体育館。しかし10月から始まる本シーズンにおいては、冬の台風や暴風、降雨、降雪などの悪天候によって本土からの船や飛行機が止まってしまう恐れがあり、公式戦は開催できないハンデがあるため、今シーズンのスサノオマジックを左右する大切な試合となる、プレシーズンゲーム第1発目を行うことになりました。

当日は雨模様の中にもかかわらず約千名もの多くのお客さまに御来場いただきました。試合は新加入選手のケネディ選手、川辺選手の活躍もあり、73対65と快勝！隠岐の地でスサノオマジック初白星を挙げました。

今シーズンよりブラシオスヘッドコーチに変わり、神話第四章はまさに「新生スサノオマジック」。ファイナルの地・有明をめざし、来年4月末まで島根県内6カ所・24試合を含む全52試合が10月5日より始まります。

地元プロチームの活動をボランティアとして支え、地域の人々の笑顔、元気を会場から届ける一端を担ってみよう!!

試合運営ボランティアの内容

- チケットのもぎりなどの会場入り口での活動
- お客さまのお席を案内など、ファンクラブ受付などの会場内での活動 他

お問合せは

✉ info-magic2@susanoo-m.com

または

島根スサノオマジックの最新情報・試合・チケットなど

島根スサノオマジック

検索

お問い合わせ先

島根スサノオマジック事務局 0852-60-1866 (平日10時~18時)

島根大学支援基金寄附者一覧 ご協力ありがとうございました。

(平成25年6月~平成25年8月にご寄附いただいた皆様)
(五十音順・敬称略)

法人等からのご寄附

株式会社コクエイ

個人からのご寄附

池永 健 高田 謙一 高田 郁子

島根大学では学生に対する学修支援及び社会貢献事業を充実させるため、「島根大学支援基金」を募集しています。寄附書はホームページにも掲載しておりますが、郵送もいたしますので、お問い合わせください。TEL:0852-32-6603(総務課) ホームページ http://www.shimane-u.ac.jp/introduction/fund/fund_recruit/ ※ご寄附をいただいた皆さまの中で、「HP等への掲載を希望しない」とされた方は、掲載しておりません。

投稿のお願い

投稿先

『広報しまだい』は、島根大学と地域の方々との相互理解を大きな目的としています。島根大学から地域に情報を発信してほしいこと、地域の方々からの島根大学に関する話題、島根大学に対する要望、その他ご意見、ご質問などをお気軽にお寄せください。ご投稿お待ちしております。

〒690-8504 松江市西川津町1060 島根大学 広報室
TEL: 0852-32-6603 FAX: 0852-32-6019
E-mail: gad-koho@office.shimane-u.ac.jp
ホームページ: <http://www.shimane-u.ac.jp>

PRESENT

ご意見をいただいた皆さまの中から抽選で10名様に、島大農場で収穫・加工された「煎茶」をプレゼントします。

※当選者のお知らせは発送をもって代えさせていただきます。
※応募締切/平成25年12月13日必着



編集後記

猛暑の夏が過ぎ、すっかり秋らしい季節になりました。静かだったキャンパスにも夏季休業期間を終えた学生達で賑やかさが戻ってきました。

さて、今号では学長と留学生のランチミーティングを特集いたしました。記事中には取り上げていませんが、この企画には2名の日本人学生も参加していました。そして2名とも海外へ出た経験がないとの事。慣れない留学生との交流で、初めは緊張した様子で話を聞いていましたが、話題が食文化の違いになると大盛り上がり。特に日本で食べる機会が少ない食材の話に大変驚いていました。学長から「時間に余裕のある学生のうちに海外に出て、見識を広めてほしい」と話がありましたが、海外に興味を持ってもらうよい機会になったのではないかと思います。この輪が今後ますます広がり、国際色豊かな大学になることを期待しています。

次号の「広報しまだい」は、来年1月に発刊する予定です。どうぞお楽しみに。

古代出雲文化フォーラムII

- Forum on Ancient Izumo Culture II -



文化庁所蔵

～古代出雲文化と現代の製鉄へつながる“たたら”へのいざない～

平成26年

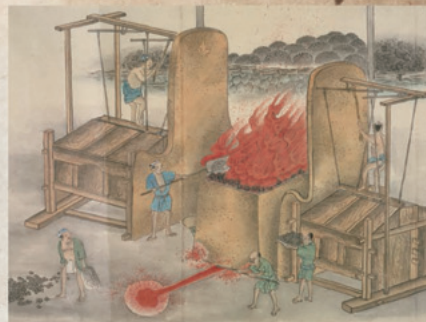
3月9日(日)

13:00～16:00

会場 広島国際会議場 国際会議ホール「ヒマワリ」 〒730-0811 広島市中区中島町1番5号(平和記念公園内) TEL (082) 242-7777



青戸 慧作「大国主命と白兔」加納美術館所蔵



「東京大学工学・情報理工学図書館工4号館図書室A」所蔵

参加無料

定員 600名 (抽選)

参加申込

参加には事前のお申込みが必要です。

平成25年10月1日より受付開始

申込先

島根大学ホームページ、またはFAX・ハガキにてお申込みください。

HP <http://www.shimane-u.ac.jp> ハガキ 〒690-8504 島根県松江市西川津町1060 FAX (0852) 32-6019

〈主催・お問い合わせ先〉

島根大学総務部総務課 TEL(0852)32-6604



プレフォーラム

島根大学ミュージアム特別講座

「出雲文化へのいざない～弥生青銅器・たたら・出雲国風土記～」



広 in 島

会場 広島市まちづくり市民交流プラザ 〒730-0036 広島市中区袋町 6-36
HP <http://www.cf.city.hiroshima.jp/m-plaza/>

第1回 日時 平成25年10月5日(土) 13:30～14:45
場所 5F 研修室B

「出雲神話のロマンとたたら」
大庭 卓也 島根大学総合理工学研究所教授

第2回 日時 平成25年11月2日(土) 13:30～14:45
場所 5F 研修室B

「出雲のたたら製鉄」
角田 徳幸 島根県教育庁文化財課企画幹

第3回 日時 平成25年11月30日(土) 13:30～14:45
場所 5F 研修室B

「弥生時代の出雲青銅器文化」
松本 岩雄 島根県教育庁文化財専門官

第4回 日時 平成25年12月7日(土) 13:30～14:45
場所 6F マルチメディアスタジオ

「弥生時代の四隅突出型墳丘墓」
會下 和宏 島根大学ミュージアム准教授

第5回 日時 平成26年1月11日(土) 13:30～14:45
場所 5F 研修室C

「考古学から見た出雲国風土記」
大橋 泰夫 島根大学法文学部教授

第6回 日時 平成26年2月8日(土) 13:30～14:45
場所 5F 研修室C

「中国山地の暮らしと文化-たたら-」
島津 邦弘 元中国新聞編集局次長・元比治山大学教授

参加無料

宍道湖・中海周辺部から中国山地までを含む出雲地域では、先史時代から現代にいたるまで、多様で個性的な文化が展開してきました。この特別講座は、弥生時代以降の出雲文化にまつわる様々なトピックのなかから、弥生青銅器、弥生墳丘墓、たたら製鉄、『出雲国風土記』を取り上げて、それぞれの専門研究者が分かりやすく解説し、来る平成26年3月開催の「古代出雲文化フォーラムII」へいざなう企画となっております。

定員 60名(先着順)

お問い合わせ 島根大学広島オフィス 広島市中区立町 1-23 こうぎん広島ビル 4F TEL (082) 236-1926